

# 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 尾 関 直 樹

論 文 題 目

Significance of the serum carcinoembryonic antigen level during the follow-up of patients with completely resected non-small-cell lung cancer


(非小細胞肺癌完全切除例における術後経過観察中の血清 CEA 値の意義)

論文審査担当者

主 査


委員

名古屋大学教授

長谷川好規 


委員

名古屋大学教授

柳野正人 

委員

名古屋大学教授

小寺泰弘 

指導教授

名古屋大学教授

横井音平 

## 論文審査の結果の要旨

この研究の目的は、非小細胞肺癌 (NSCLC) 切除後に血清 carcinoembryonic antigen (CEA) 値が肺癌再発発見の指標となるか、また予後因子であるかを検討することである。2001年4月から2006年3月にNSCLCに対して完全切除術が施行された518例を対象とした。患者を手術前と手術後1-3カ月のCEA値によって3グループに分けた：術前後とも正常値 (Nグループ、380例)、術前高値だが術後正常値 (HNグループ、105例)、術前値に関わらず術後高値 (Hグループ、33例)。さらに再発・死亡まで、または5年間以上CEA値を観察し、これらCEA値の変化と予後との関連を統計学的に評価した。観察期間中の1回以上のCEA高値が再発発見の指標となるかの感度・特異度は、Nグループで30%・98%、HNグループで82%・73%であった。多変量Cox回帰分析では、術前ではなく術後1-3カ月のCEA値が全生存期間の予後因子であった ( $p = 0.001$ )。CEA値が術前高値だが術後1-3カ月に正常化した患者に対しては、経過観察期間中のCEA値測定が再発発見に有用であると思われる。また、術後1-3カ月のCEA値は全生存期間の予後因子である。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 特にHNグループにおいて、術後経過観察中のCEA測定は再発の早期発見に寄与すると思われる。また、手術後のCEA値は術後補助治療適応の指標の一つとなる可能性がある。
2. CEAの術前後でのCEA増減率の中央値は  $-0.29$  (範囲:  $-0.99$ から $5.48$ )であった。これは多変量Cox回帰分析では全生存期間の予後因子ではなかった。しかし、術前CEA高値 ( $>5.0$  ng/ml) の133例に限った解析では、CEA増減率は全生存期間の予後因子であった (HR 1.789,  $P < 0.001$ )。
3. 経過観察中の他癌の発見については研究デザインの際に検討項目に入っておらず、明らかではない。
4. 本研究の限界であるが、喫煙のCEA値に対する影響を排除できないため、特に扁平上皮癌の患者ではCEA値の解釈に注意を要すると思われる。岡田らは、CEA値は扁平上皮癌患者よりも腺癌患者において予後をより正確に反映すると報告している (Ann Thorac Surg. 2004;78:1004-9)。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	尾関直樹
試験担当者	主査	長川規	柳野人	小寺泰弘
	指導教授	横井春平		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 本研究が示す、CEA値測定の意義は何か
2. CEA値が術前後でどの程度変化したかの全生存期間に与える影響について
3. 経過観察中の他癌発見について
4. 腺癌と腺癌以外の組織でのCEA値の解釈について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、呼吸器外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。